



この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。このほかに、カッパ・ブックスではどんな本を読まれたでしょうか。このつきには、どんな本を読みたいとお考えですか。この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町三ノ一九

光文社

神吉晴夫

ノンフィクション・ミステリー 下山総裁怪死事件 “迷宮入り” を科学推理する

昭和38年9月20日 初版発行

検印廃止 ￥270

著者

みやぎ 城 音 弥
みやぎ 城 ふ み こ
子

東京都大田区雪ケ谷町525

発行者 神吉晴夫

印刷者 堀内文治郎

東京都千代田区神田三崎町2

堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽町3 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

〔岩淵製本〕

表紙の模様・意匠登録 116613

© Otoy Miyagi 1963
Fumiko Miyagi

インフィクション・ミステリー

ト山総裁怪死事件

“迷宮入り”を科学推理する

宮^{みや}城^ぎ
二^ふ音^{おと}
三^み
子^こ弥^や
著



カッパ・ブックス

まえがき

事實は小説より奇なり、ということばは、なによりも、まず、現實の社會におこつた奇怪な事件のためにつくられたものであらう。

われわれは、作家が想像によつて生み出す荒唐無稽こうどうむきな小説にあきあきした。現實に存在することのありえない連続殺人事件や、意外な犯人の話にうんざりした。

現實の事件を探究し推理する以上にサスペンスに富んだものはないし、ノンフィクション・ミステリーにまさるミステリーはないのではなからうか。

ノンフィクション・ミステリーの題材として、われわれは、まず、下山事件しもやまを選んだ。この事件については、すでに松本清張氏まつもとせいちょうがきわめて巧みな叙述を行なっているが、われわれが、あえて、この推理小説界の鬼才に挑戦するのは、ノンフィクション・ミステリーには推理小説とことなつた発想が必要だということをしめしたかつたからにはほかならない。

ノンフィクション・ミステリーが人々を魅するのは、「事實の力」であつて、「筆の力」ではな

い、ノンフィクション・ミステリーは最後の判断を読者に一任する。読者たる陪審員だけが、事件を解決するであろう。

昭和三十八年八月

宮^{みや}
城^ぎ
音^{おと}
弥^や

目次

まえがき

1 発端

1 行方不明

2 死体発見

3 捜査開始―運転手のなぞ

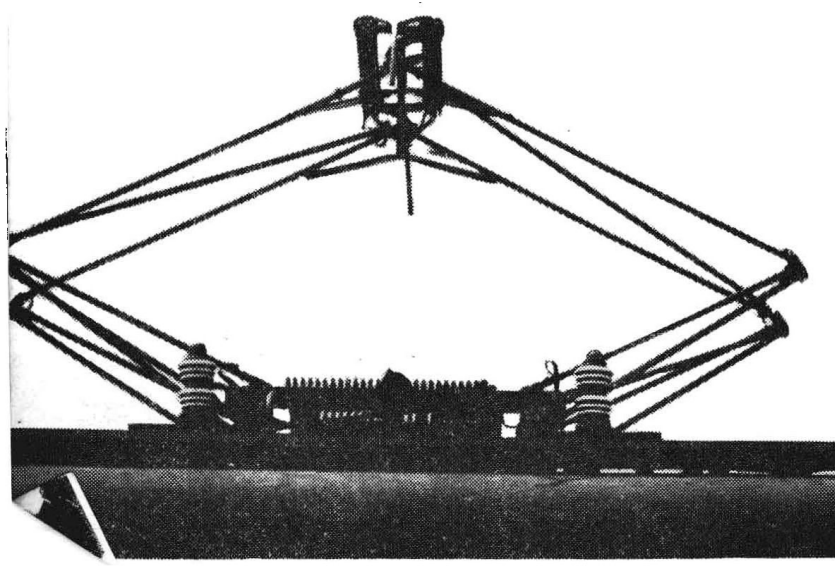
4 カゲに女あり

5 なぜ三越か

2 自殺？

1 カンと目撃者

42 41 38 31 26 21 12 11 3



2 物的証拠

3 なぜあの場所が選ばれたか

4 不安

5 神経衰弱

6 血統・病気・性格

7 周囲の印象

8 家族のカン

3 他殺？

1 目撃者の供述

2 犬が鳴いた

56

59

65

74

81

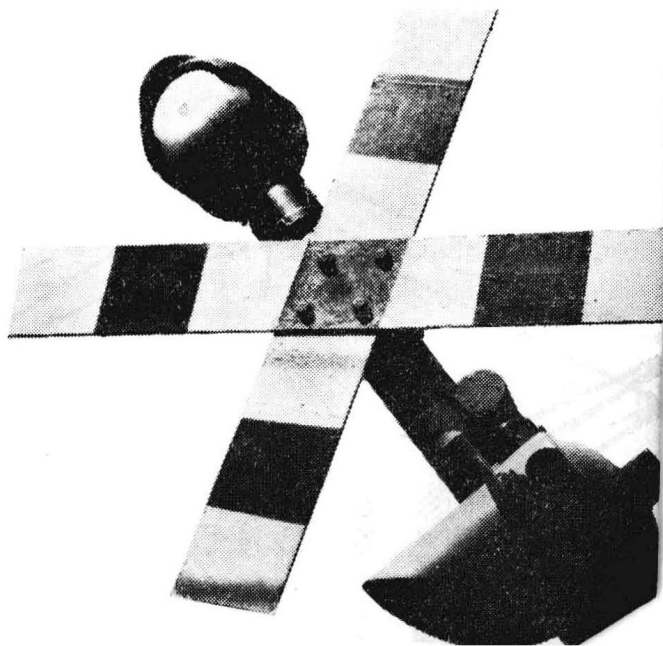
85

88

93

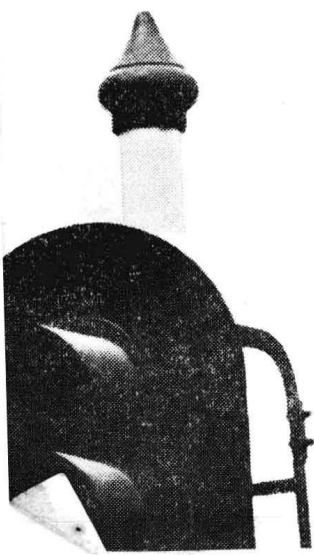
94

105



12	犯人の目撃者	185
11	疑 惑	179
10	運搬の経路	159
9	ふしぎな三事実	154
8	事件の予告	145
7	ごみ・油・色素	137
6	血痕の発見	129
5	解 剖	117
4	現場の状況	114
3	性格の再検討	107

185 179 159 154 145 137 129 117 114 107



13 家族などのカン

4 犯人は？

188

1 アメリカ軍部の謀殺―松本清張説

194

A 占領軍の列車

194

B 派閥争い

199

C 情報収集

203

2 国際共産党の謀殺―加賀山之雄説

206

3 反共陣営による謀殺

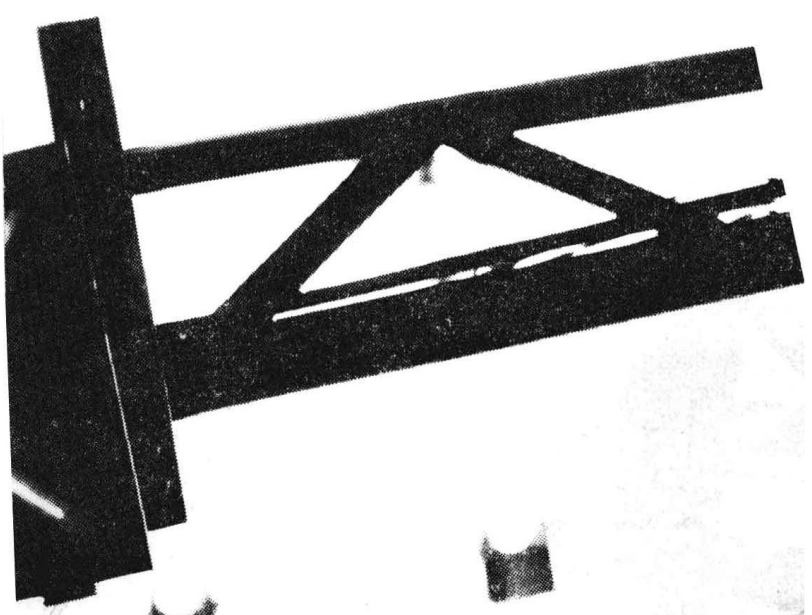
210

4 諸説の批判

213

5 当時の社会情勢

232



A 占領下の国鉄

B 経済再建と人員整理

C 九月革命説

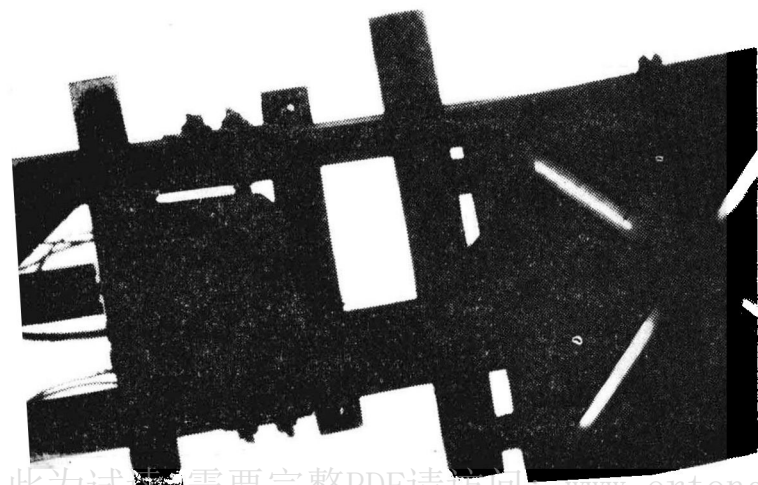
D 類似の事件

5 陪審員の判断は？

● 文 献

あとがき

233 236 240 245 249 255 256



一 本書のうちでは、すでに公おおやけにされている人名は、すべて本名をそのまま用いたが、公表されていないものは匿名にしたことをおことわりしたい。

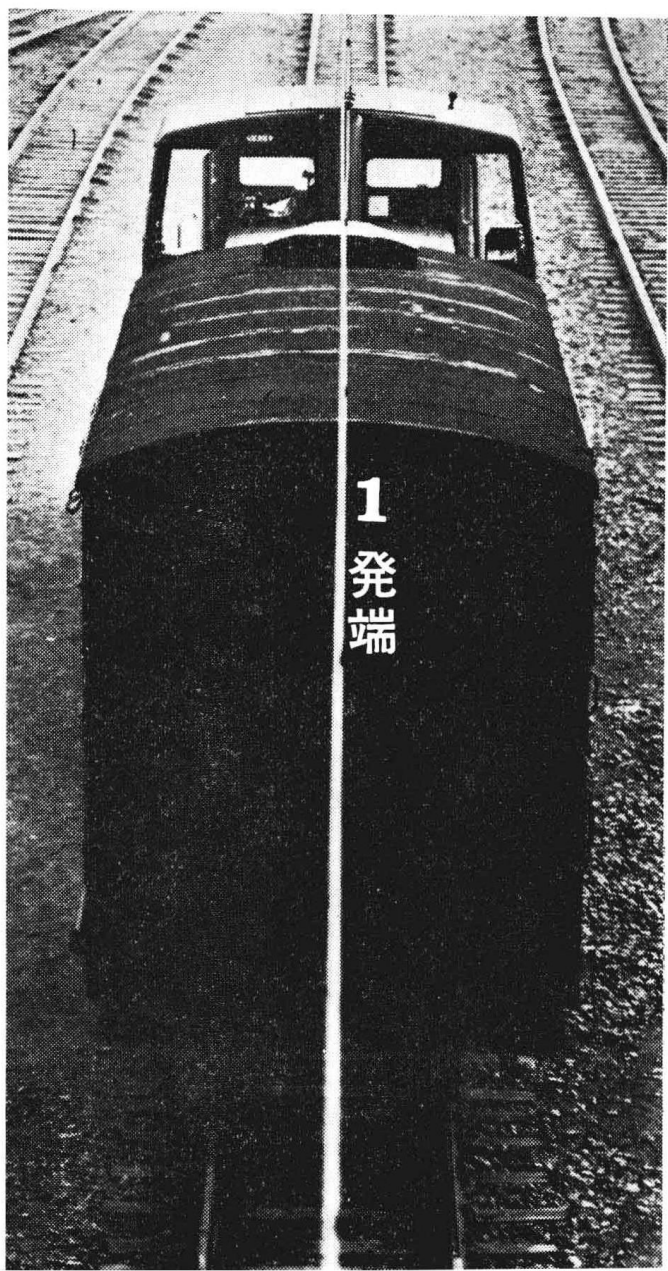
二 「白書」は、警視庁下山事件特別捜査本部のつくった「下山国鉄総裁事件捜査報告」(「改造」文春)昭和二十五年二月号、三月号)、『追憶』は、下山総裁記念事業会の『下山総裁の追憶』の略。

三 写真は、事件当時のものは、朝日新聞社の好意による。また、現場付近を、あらたに、島内英しまうちやうえい佑氏に撮影願った。

四 本書の中の時間は、すべて、サマー・タイムによる。(当時は、夏の間、全国いっせいに時計を一時間はやくしていた。)



ありし日の下山定則氏



1 行方不明

その日の朝——昭和二十四年七月五日——下山国鉄総裁は、いつもの時刻に国鉄本庁（現在、国鉄本社）に姿をあらわさなかった。

九時十五分ごろから九時のあいだにかならず到着するはずの総裁の自動車が、九時すぎてもこない。秘書の大塚辰治氏おおくま たけじが総裁の自宅に電話をかけたが、いつものとおり出ました、という夫人の返事である。

ときには出勤の途中で、寄り道をしてくることもあるので、秘書は、総裁の立ち寄りそうところへ、つぎつぎに連絡した。どこにも、行っていない。

この日は、朝十時に、首切り問題で——前日、国鉄では二万七千人にのぼる大量解雇の通告をした——組合との話し合いに出席する約束になっていたし、十一時には、総司令部の人たちとの会心の約束があったが、姿をみせない。

正午になった。以前、總裁の秘書をしていた人で、上野管理部の旅客課長をしていた折居正雄氏に心あたりを聞くと、料理屋で森田のぶさんという女性のやっている成田屋に問い合わせてみてはどうか、という。

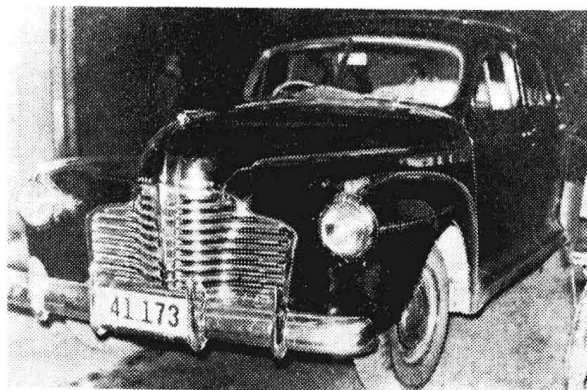
だが、そこでも、みえていない、という返事である。とうとう午後二時ごろには、行方不明と決定して警視庁に電話した。その結果、国警本部と警視庁が相談して「下山總裁、行方不明」の正式発表をおこなうことになり、午後五時には、これがラジオで放送されたのである。

たまたま自動車内のラジオを聞いていた總裁付の運転手、大西政雄さんは、びっくりして本庁に連絡してきた。九時半ごろ、總裁を三越に送りこんで、ずっとそこで待っているのだという。

大西さんによると、下山總裁の朝の行動はこうだった。

車で自宅を出たのは、だいたい、いつものとおりで八時二十分ごろである。

總裁の家は、大田区上池上一〇八一番地で、洗足池の近くに



帰らぬ總裁を待っていた黒塗りの
ビュイック

あった。洗足池の東南に、もう一つ、小池こいけという池があって、釣り堀になっているが、その近くの静かなところである。五反田ごたんだから蒲田かまたに行く池上線いけがさが近くを通っていて、その洗足池という駅でおり、商店街をぬけて南に行き、左に坂をのぼったところで、歩いて四、五分のところである。そばには小池小学校という小学校がある。

池上線にそって、その北側に中原街道なかはらが通っているが、車で都内に出るには、まず、この街道に出て五反田に向かう。当時は「中原街道」という標識はたてられてなく、B Av. とだけしるされていた。

総裁の車——黒塗りのビュイック41-173——は大西運転手に運転されて、このB Av. を通って五反田に向かった。

このB Av. は五反田から魚籃坂ぎょらんざか、三田みたを通っていて、これが国鉄本庁に行くにはいちばん近いはずだが、大西運転手は、いつも、広い道路を選び品川しながわをまわってA Av. つまり、札ノ辻さだつじから御成門おなりもん——田村町たむらうちょう——日比谷ひびやというコースをとっていた。

この日も、この道を通った。

バックミラーで見ると、総裁は深くどっしり腰をおろして朝の景色を見ていたが、御成門付近にきたとき、

「佐藤さんのところへ寄るんだった。」

と言い出した。佐藤さんというのは佐藤栄作氏さとうえいさくのことである。運転手が、

